



高浜虚子 たかはまきよし

1874年（明治7）～1959年（昭和34）俳人、小説家

ホトトギス派を主宰（生涯に20万句余の俳句を詠んだ）本名は、高浜清 きよし

1874年（明治7）2月22日、愛媛県松山市長町新丁に、伊予松山藩士・池内庄四郎

政忠の五男として生まれた。母は柳。

1880年（明治13）6歳、12月、第一次ボーア戦争勃発。

1882年（明治15）8歳、5月祖母峯没、祖母方の高浜家を継ぐ。

1887年（明治20）13歳、東京美術学校設立

1888年（明治21）14歳、伊予尋常中学（旧姓松山中学、

今の愛媛県立松山東高校）に入学。1歳年上の河東碧梧桐と同級になる。

1889年（明治22）15歳、「大日本帝国憲法」発布。陸羯南、新聞「日本」創刊。

1890年（明治23）16歳、「教育勅語」発布。碧梧桐を介し子規に野球を教わる。

1891年（明治24）17歳、5月、子規と文通がはじまる。6月松山で子規に会う。

10月、子規より虚子の号を授かる。

1892年（明治25）18歳、4月、伊予尋常中学校卒業。



三高時代の虚子

9月、碧梧桐と共に第三高等学校（今の京都大学総合人間学部）に入学。

1893年（明治26）19歳、碧梧桐と寢食を共にし、下宿を「虚桐庵」などと名付けた。夏、「夕顔論争」

1894年（明治27）20歳、秋、碧梧桐と共に第二高等学校（後の東北大学教養部）に転入したが、一ヶ月後、

碧梧桐と共に中退し上京、二人で本郷の下宿に同居。

虚子の放蕩時代、娘義太夫に入れあげ、小土佐に恋した。

子規の叱責やまず。日清戦争勃発。

1895年（明治28）21歳、碧梧桐と本郷に下宿。4月、松山で漱石と会う。

4月、漱石、伊予尋常中学の教師となる。同じころ、

子規、従軍記者になり満韓へ、日清戦争終結。

子規は帰国途中に大咯血、入院治療後、8月末頃、

松山の漱石の許へ転がり込む。



当時の女義太夫（娘義太夫）

日本は下関条約により清国に朝鮮国が独立国であることを認めさせた。

（これは日本の権益確立のため）神戸・須磨で子規を看病。8月頃、須磨で子

規から後継者の打診。新聞「日本」に執筆。

12月、子規からの「文学上の後継者に」という要請を拒否（道灌山事件）

虚子、「私は学問をする気は無い」、子規、「今日限りお前を後継者として考えるこ

とはやめる、今後お前に忠告する権利も義務も無いものになった」虚子、「升さん

の忠告を受け入れ実行する勇氣はない」と答えた。

「この明治二十七年から三十年にいたる足かけ四年の間は、小説の筆はしばらく

擱きまして、俳句を作るといふことに傾いてをりました」『虚子自伝』より）

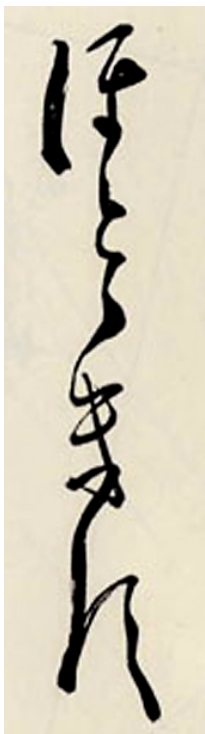
12月、「国民新聞」俳句欄選者となる。子規、虚碧の句を「明治の新調」と絶賛。

1896年（明治29）22歳、12月、「国民新聞」俳句欄選者となる。子規、虚碧の句を「明治の新調」と絶賛。

1897年（明治30）23歳、1月15日、柳原極堂、松山で『ほととぎす』創刊。部数は三百。

虚子は、碧梧桐が天然痘で約一ヶ月間入院中に碧梧桐の婚約者であった

大畠いと（糸子）と親しくなり、6月、結婚した。



しもむらいざん
下村為山筆



「ほととぎす」創刊号

10月、独立国となった朝鮮国は、国号を「大韓帝国」と改めた。

1910年までの短期間ではあるが、朝鮮史上初の独立主権国家が誕生した。

1898年（明治31）24歳、1月、萬朝報に入社。3月、長女真砂子生まれる。米西戦争勃発。

故郷の母の看病のため度々帰郷、その結果、萬朝報社を長期欠勤して首になる。

生活苦。虚子は子規に手紙を書き、俳誌『ほととぎす』の発行所を東京に移転する

よう提案、10月、虚子が発行人を引き継ぎ、俳句だけでなく和歌、散文などを加え

て俳句文芸誌として東京で再出発した。

新生号は、60頁、9銭。

発売後数時間で1500部が完売。

即日500部増刷された。11月、母没。

第二次ボーア戦争勃発。商売熱心になる。

1899年（明治32）25歳、第二次ボーア戦争勃発。義和団事件（北清事変）

1900年（明治33）26歳、義和団事件（北清事変）

写生文多く書く。

5月、碧梧桐「ホトトギス」に入社。

9月、子規庵で初めての「山会」開かれる。

12月、長男尾生まれる。

1901年（明治34）27歳、9月、出版社俳書堂を設立。

左千夫、碧梧桐らと子規の看護にあたる。

1902年（明治35）28歳、9月19日、正岡子規没

子規没後、新聞「日本」俳句欄の選者を

碧梧桐が継ぎ、『ほととぎす』の編集も碧梧桐がしていた。

10月、『ほととぎす』の雑誌名を片仮名の『ホトトギス』と変更。

第二次ボーア戦争終結

1903年（明治36）29歳、10月、碧梧桐の「温泉百句」を批判。

11月、碧梧桐反論。次女立子生まれる。

1904年（明治37）30歳、白露戦争勃発。9月「連句論」、

10月、「俳体詩論」発表。12月、虚子、漱石に文章を書くことを勧め、

出来た『吾輩は猫である』を「山会」で朗読。「写生趣味と空想趣味」

1905年（明治38）31歳、白露戦争終結。1月、漱石『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に連載開始。人気

で発行部数が八千部にもなったという。『ホトトギス』百号に達する。碧梧桐は新

傾向色を強める。

1906年（明治39）32歳、『俳諧馬の糞』刊。3月、碧梧桐に対抗して「俳諧散心」句会開始。『帆立貝』刊『ホ

トトギス』に漱石『坊っちゃん』。10月、次男友次郎生まれる。

1907年（明治40）33歳、『ホトトギス』に浅井忠・竹久夢二が挿絵を描いている。小説への移行を決意。

4月、小説「風流懺法」、5月、小説「斑鳩物語」、7月「大内旅館」を『ホトト

ギス』に発表。5月『俳諧一口噺』刊。5月、漱石、朝日新聞社に入社。

1908年（明治41）34歳、1月『鶏頭』『新写生文』刊。2月『稿本虚子句集』刊。『国民新聞』に「俳諧師」

を連載。8月「日盛会」を開催。10月『国民新聞』文芸部長に就任、俳句の

ことは碧梧桐に委せて、俳句訣別を宣言し小説に専念する。自然主義流行。

1909年（明治42）35歳、1月『国民新聞』に「続俳諧師」を連載。

5月、三女宵子生まれる。12月、麹町に転居。

『子規句集』を碧梧桐との共編で刊。

漱石『三四郎』それから



明治42年3月の虚子



「能楽」創刊号表紙
明治35年7月
池内信嘉（虚子の兄）発行



「ホトトギス」
明治35年10月
下村為山装幀



明治33年12月の虚子（子規庵の庭で）



「ほととぎす」
明治31年10月
下村為山装幀
虚子の手によって
発行された新生号。

1910年（明治43） 36歳、『ホトトギス』の発行部数が急低下し、財政難になる。秋、『国民新聞』を退社し、「ホトトギス」編集に専念。

12月、鎌倉由比ガ浜に移住、亡くなる日までの50年間をここで過ごした。8月29日、日韓併合。大逆事件。



虚子『俳諧師』表紙

1911年（明治44） 37歳、4月、朝鮮へ旅行。7月、小説『朝鮮』発表。「子規居士と余」の連載始まる（大正4まで）。碧梧桐、『ホトトギス』の編集より離れる。荻原井泉水『層雲』創刊。

幸徳秋水ら死刑。森鷗外『雁』。10月10日、辛亥革命勃発。1912年（明治45・大正元） 38歳、1月1日、中華民国成立。2月12日、宣統帝（溥儀）退位、清国滅亡。

啄木『悲しき玩具』。『朝鮮』刊。「お丁と」を『国民新聞』に連載。『ホトトギス』誌上に雑詠選を復活させる。7月、四女六子生まれる。



虚子（大正4年頃）

1913年（大正2） 39歳、**碧梧桐の新傾向俳句に対抗するため俳壇に復帰**。守旧派（古典主義）を称し定型と季題趣味の重視を唱えた。2月「春風や閑志いだきて丘に立つ」「霜降れば霜を楯とす法の城」（虚子）3月「暫くぶりの句作」発表。嶋田青峰に『ホトトギス』の編集を任せる。6月、『ホトトギス』200号記念能楽を開催。「主観写生」提唱

1914年（大正3） 40歳、**「虚子即ホトトギスと心得居る事」**（『ホトトギス』1月号・巻頭にて）、**「新傾向に反対する事」**（碧梧桐への宣戦布告）4月、四女六子没。高村光太郎『道程』

1月、碧梧桐『続千里上巻』6月、第一次世界大戦勃発。

1915年（大正4） 41歳、1月、五女晴子生まれる。小説「柿二つ」を

「東京朝日新聞」に連載。4月、「進むべき俳句の道」を

「ホトトギス」に連載。『子規居士と余』刊。小説『落葉降る下にて』

11月、婦人俳句会を始める。12月、碧梧桐『新傾向句集』

1916年（大正5） 42歳、新作能「鉄門」発表。5月『俳句の大道』刊。

12月9日、漱石没。

1917年（大正6） 43歳、9月、大町より原の台へ移住。11月、「俳談会」開催。

「漱石氏と私」を「ホトトギス」に連載。

「京都で会った漱石氏」を「ホトトギス」に掲載。

11月、ロシア革命。

1918年（大正7） 44歳、1月、『漱石氏と私』、4月、『俳句はかく解しかく味う』

「俳句は即ち芭蕉の文学である」

7月、『進むべき俳句の道』刊。8月、「山会」復活。『漱石氏と私』刊

1919年（大正8） 45歳、1月、新作能「実朝」を発表。6月、六女章子誕生。

1920年（大正9） 46歳、2月、京都三高俳句会設立句会に臨む。

1922年（大正11） 48歳、4月、東大俳句会復興句会に臨む。

9月『ホトトギス雑詠選集』刊。鷗外没（60歳）



「井筒」を舞う虚子（大正7年春）

1923年（大正12） 49歳、1月、『ホトトギス』発行所を丸の内ビルディングに移る。9月、関東大震災

1924年（大正13） 50歳、9月、満鮮旅行。「写生といふこと」を連載。「客観写生」を提唱

1925年（大正14） 51歳、「雑詠句評会」を始める。

1926年（大正15・昭和元年） 52歳、8月、東京放送局で「俳句漫談」を放送。放哉没（42歳）

1927年（昭和2） 53歳、「花鳥諷詠」の提唱を始めた。次男友次郎フランスへ遊学。龍之介没（36歳）

1928年（昭和3） 54歳、6月『虚子句集』刊。
 1929年（昭和4） 55歳、12月『ホトトギス』六百号に達する。
 1930年（昭和5） 56歳、次女の星野立子に俳誌『玉藻』を創刊主宰させる。
 1931年（昭和6） 57歳、9月、満州事变。

秋桜子、『自然の真』と『文芸上の真』『馬酔木』10月号を發表。

秋桜子「ホトトギス」を離脱、「馬酔木」独立。

ここに、伝統俳句界は、虚子派と秋桜子派の
 一派に分裂し、この二派が俳句界の主力となる。



秋桜子（昭和7年）

1934年（昭和9） 60歳、4月、『高浜虚子全集』刊。

1935年（昭和10） 61歳、10月、「還暦座談会」で、「私を信仰しろ」と述べる。11月、中村吉右衛門の為に

書いた「髪を結ふ一茶」が東京劇場で上演される。

1936年（昭和11） 62歳、2月、章子を伴って渡仏。フランス留学中の次男、池内友次郎の部屋に入る。パリで俳句講演。ベルギー、オランダ、ドイツ、イギリスなどを巡り、講演を行い、パリにもどり、フランス・ハイカイの詩人たちと懇談。6月帰国。

1937年（昭和12） 63歳、6月、自選句集『五百句』刊。帝国芸術院会員となる。

7月7日、日中戦争（支那事变）勃発。

1938年（昭和13） 64歳、4月、『ホトトギス』500号に達する。

1939年（昭和14） 65歳、9月1日、第二次世界大戦勃発。

1940年（昭和15） 66歳、10月、チャップリンの「独裁者」公開。12月、日本俳句作家協（情報局による思想統制のための組織）が結成され、虚子会長に就任。



虚子

1941年（昭和16） 67歳、12月8日、太平洋戦争勃発。

1942年（昭和17） 68歳、6月、日本文学報国会俳句部長となる。

12月、『俳句の五十年』刊

1944年（昭和19） 70歳、9月、信州小諸に疎開。

1945年（昭和20） 71歳、9月2日、第二次世界大戦終結。

1946年（昭和21） 72歳、桑原武夫「第二芸術論」

1947年（昭和22） 73歳、小説『虹』を書く。10月、鎌倉に戻る。

1948年（昭和23） 74歳、11月、『虚子自伝』刊。

1949年（昭和24） 75歳、10月1日、中華人民共和国建国。

1950年（昭和25） 76歳、6月25日、朝鮮戦争勃発。

1951年（昭和26） 77歳、3月、『ホトトギス』を年尾に譲る。

1952年（昭和27） 78歳、『玉藻』1月号から俳話を連載。これがあとでまとめられ、



虚子



「句謡会」前列右より真砂子、立子、虚子、晴子

『俳句への道』（岩波新書）として昭和30年に出版された。その中などで虚子は、

「如何に窮乏の生活に居ても、如何に病苦に悩んでいても、一たび心を花鳥風月に寄することによってその生活苦を忘れ病苦を忘れ、たとい一瞬時といえども極楽の境に心を置くことが出来る。俳句は極楽の文学という所以である」（『俳句への道』

「日常の存問が俳句だ。」（『朝日新聞』の「小俳話」昭和32年12月29日）

「（俳句は）天地有情、天地万象の命との交響。」と述べている。

1953年（昭和28） 79歳、7月27日、朝鮮戦争終結。

1954年（昭和29） 80歳、11月、文化勲章授与。

1958年（昭和33） 84歳、2月、『虚子俳話』刊。

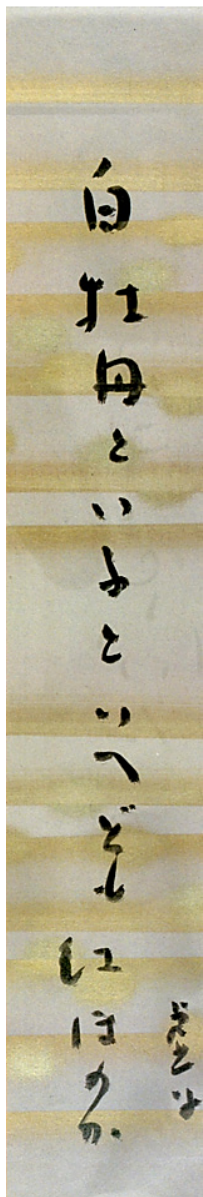
1959年（昭和34） 85歳、4月8日、脳出血のため死去。墓は鎌倉寿福寺。



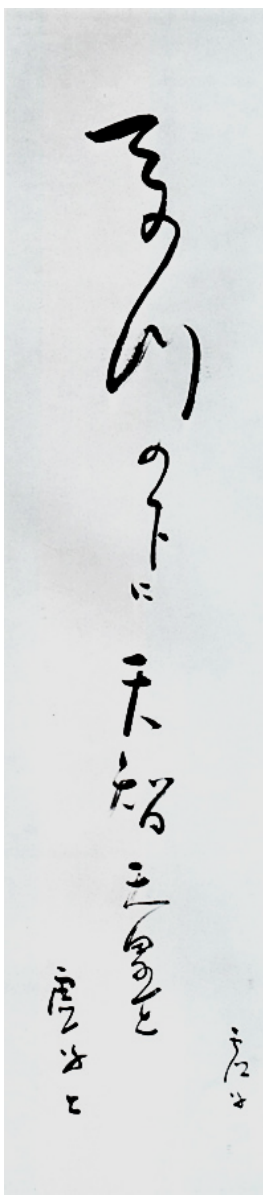
俳人初の文化勲章受章のとき



「玉藻」創刊号表紙（昭和5年）



虚子「新年四季短冊」大正14年の句。昭和30年頃の書



虚子「条幅」昭和27・28年頃書
大正6年の句

虚子、
後期の詩書



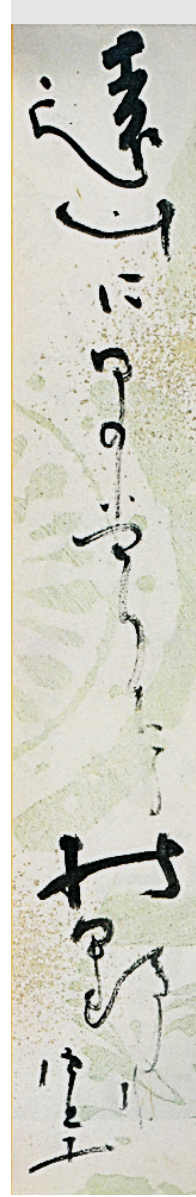
虚子「色紙」大正から昭和初期の書 明治33年の句
遠山に日の当りたる枯野かな 虚子

子規は、虚子と碧梧桐の作風の比較を雑誌「日本人」第31号（明治29年）に書いている。
「碧梧桐は冷かなること水の如く、虚子は熱きこと火の如し。碧梧桐の人間を見るは猶無心の草木を見るがごとく、虚子の草木を見るは猶有情の人間を見るがごとし。随って其作所の俳句も一は写実に傾き一は理想に傾く、一は空間を現し一は時間を現す、是れ二人の全く相違なる所なり。」
怒涛岩を噛む我を神かと朧の夜 虚子
赤い椿白い椿と落ちにけり 碧梧桐

あまがわしたてんじてんのう
天の川の下に天智天皇と虚子と 虚子

はくばたん
白牡丹といふといへども紅ほのか 虚子

虚子、
前期の詩書



虚子「短冊」明治33年 酔筆らしい

とおよま
遠山に日の当りたる枯野かな 虚子

あきつやまにのゝことき道 虚子

松山市立子規記念博物館蔵



虚子「画賛」書は明治末、句は明治36年作。
画は下村為山筆

うめすつとおは
先生が瓜盗人で在せしか 虚子

松山市立子規記念博物館蔵



虚子「条幅」書は大正前期、句は明治29年

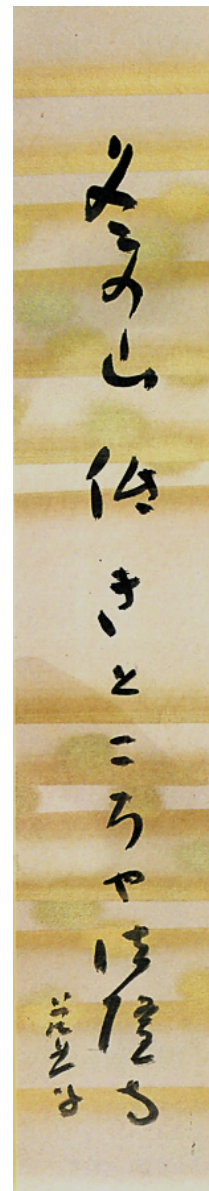


虚子「新年四季扇面」昭和30年頃の書 松山市立子規記念博物館蔵 山茶花のこびしとも亦ねびしとも 虚子



虚子「小色紙」約10×12cm 昭和25・26年頃の書
昭和3年作の句
咲きみちてこぼるゝ花も無かりけり 虚子

冬の山低きところや法隆寺 虚子



虚子「新年四季短冊」 明治38年作句。昭和30年頃

明治26年夏、子規との道灌山での「夕顔問答」について、虚子は「写生趣味と空想趣味」（明治37）で述べている。咲いている夕顔を見て、子規は、夕顔の「歴史的」「空想的」な先入観を排除した、あるがままの写生により、新しい趣味を発見することについて語ったが、虚子は、季語の本意、本情にこだわり、子規の考えには同調しなかった。

虚子は、「平明にして余韻ある句」をスローガンに、「守旧派」を名乗り、始め「主観写生」、後に「客観写生」を提唱し俳壇に復帰、新傾向俳句を唱える碧梧桐と対立した。

子規は「写生」によって、伝統である季題趣味を否定しようとしたが、虚子は「写生」によって、季題を尊重した。しかし、虚子の言う写生は無意味な誤魔化しと思われる。

大正7年、虚子は「俳句は芭蕉の文学」と結論づけ、子規をないがしろにし、宗匠俳句復活のため、難しい理論（知性的なこと）は言わず、形式や伝統を重んじ、俳句の大衆化に成功した。虚子復帰後、「ホトトギス」の売り上げは伸び、大正・昭和期は俳壇即「ホトトギス」であった。虚子は、帝王のように俳壇に君臨した。今も、虚子の子や孫による世襲制が続いているのだろうか。

虚子は、弟子の、財界人、国会議員、官僚、華族、マスコミ関係者、高学歴者など国に影響力のある権力者や政治屋を優遇し、自分の子や孫をそれらの名家に嫁がせ、高浜家を名家の一員とした、という。このような生き方は、子規や漱石の志とは真逆である。恩ある人を平気で裏切る人間のようである。

虚子の提唱した「俳句は花鳥諷詠詩である」の「花鳥」は季題（四季と人事）を、「諷詠」は定型律（五七五の調子）をさし、「季題トリズムのある十七音の詩」ということらしい。つまり「有季定型」ということである。

晩年、虚子は、「俳句は極楽の文学」「日常の存問が俳句だ。」「俳句は、天地有情、天地万象の命との交響。」などと述べている。分かり易い言葉である。功成り名遂げた、と満足している人間の、大衆受けをねらった、嘘うそしく無内容な言葉である。



河東碧梧桐

1873年(明治6)～1937年(昭和12) 俳人・随筆家。高浜虚子と共に子規門の双璧と称された。本名は秉五郎。

1873年(明治6) 0歳、河東坤(静溪)の五男として愛媛県松山市千舟町で生まれた。父は松山藩士藩校明教館の教授

1880年(明治13) 7歳、父静溪、千舟学舎創設、子規らが学ぶ。楊守敬来日

1881年(明治14) 8歳、2月9日、ドストエフスキー没(59歳) 10月、ピカソ誕生

9歳、4月19日、ダーウィン没(73歳)

10歳、「かなのくわい」結成。

12歳、「羅馬字会」創立。

15歳、伊予尋常中学に入学

16歳、子規に野球を教わる。4月、チャップリン誕生

17歳、如月、青桐、桐仙などと号す。ゴッホ没(満37歳)

19歳、子規の『一家二十句』

20歳、虚子と共に京都の第三高等学校に入学。虚子と同居。チャイコフスキー没(満53歳)

4月、父逝去。宮城道雄誕生。7月、日清戦争勃発。秋、虚子と共に第二高等学校(現、東北大学)に編入、一か月後、虚子と共に中退、共に上京、本郷に同居。放蕩無頼の生活を始めた。この間の事は、碧梧桐の『寓居日記』に詳しい。

日清戦争終結。本郷に虚子と共に下宿し遊蕩生活を送る。子規従軍中「日本俳句」の主任となり日本新聞に入社。夏、子規の母を伴ない神戸に療養中の子規を見舞う。

一葉『たけくらべ』 3月、パリで世界初の映画上映

虚子と共に神田淡路町に下宿。日本新聞退社。雑誌「新声」の俳句欄選者となる。虚子と共に、子規より俳句界の新風として絶賛、子規門の双璧となつてゆく。

2月末、「春季雑詠」 赤い椿白い椿と落ちにけり

11月、樋口一葉没(満24歳)、神戸で日本初の映画上映。

「ホトトギス」の選を担当。失恋し、夏、北陸へ旅する。

「蕪村論議」を子規、虚子、鳴雪らと始める。



青年時代の碧梧桐

京華日報社入社

『俳句評釈』『続俳句評釈』出版

10月、茂枝と結婚。漱石、渡英。『明星』創刊。滝廉太郎、日本人作曲家による初めてのピアノ独奏曲メヌエットを作曲。8月25日、ニーチェ没(満55歳)

3月、自宅で俳句例会を始める。子規『墨汁一滴』。与謝野晶子『みだれ髪』。「荒城の月」「鳩ぽっぽ」など(滝廉太郎作曲)

子規『病牀六尺』。9月、子規永眠。子規没後、新聞「日本」俳句欄の選者を継ぐ

映画「月世界旅行」

1月、再度、日本新聞に入社。「温泉百句」発表、虚子が批判(温泉百句論争)。

6月、滝廉太郎没(満23歳)

日露戦争勃発。「俳三昧」始める

新傾向俳句に走る。「ホトトギス」百号に達す。

日露戦争終結。漱石『吾輩は猫である』連載開始

春、不折を初訪問、『龍門造像記』に感動する。

明治44年にかけて新傾向俳句宣伝のため二度、全国俳句行脚をした。8月6日、第一次全国旅行

開始(明治40年12月13日) 碧梧桐は、後にこの旅を「三千里」と称した。12月、日本新聞社

を退社。『続春夏秋冬』出版開始。『蚊帳釣草』刊。

漱石『坊っちゃん』セザンヌ没(67歳)

1月、青森県の浅虫温泉で、不折より中岳霊廟碑、

鑾宝子碑の拓本を贈られ六朝書に感動、

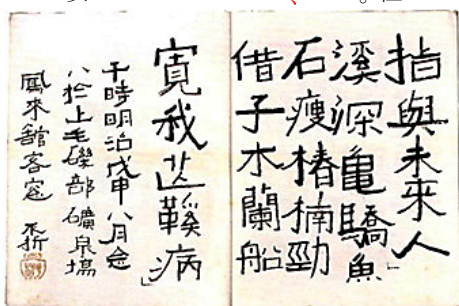
六朝書の研究を重ね、自身の書にその書風を取り入れていく。

『日本及日本人』に「一日一信」掲載。

4月、母永眠。8月、「俳句の新傾向に就て」を

発表。10月、不折『龍眠帖』出版。御矢子を養女

にする。12月、「平安堂」「龍眠」筆を試作。



明治41年10月発行『龍眠帖』不折書、碧梧桐編纂



明治40年の碧梧桐

1909年（明治42） 36歳、「城崎時代」。新傾向俳句全国的に流行。

4月24日、第二次全国旅行開始（明治44年7月13日）

（第一次、第二次の合計、約3400円の旅費の多くを東本願寺法主の大谷句仏が援助した）

『日本俳句鈔第一集』刊。11月、まど・みちお誕生。

1910年（明治43） 37歳、「玉島時代」「無中心論」（自由律化）

やがて大須賀乙字は離反する。

年末『三千里』刊。

『日本及日本人』に「統一日一信」掲載

日韓併合。大逆事件。啄木『一握の砂』

4月22日荻原礫山没（30歳） 11月20日、トルストイ没（82歳）

1911年（明治44） 38歳、7月、帰京し全国旅行終了 荻原井泉水『層雲』創刊、碧梧桐も参加する。

『新傾向句の研究』刊 幸徳秋水ら死刑

1月、「新傾向の変遷」発表。6月、「龍眠会」結成。

啄木『悲しき玩具』4月13日、啄木没（享年26歳）

1913年（大正2） 40歳、3月、『日本俳句鈔第二集』刊。11月、『龍眠』創刊。

1月、『続三千里上巻』刊。『流沙墜簡』刊行される。自由律に入る。小説を書く。太鼓を習う。

高村光太郎『道程』 第一次世界大戦勃発 チャップリン映画デビュー

1915年（大正4） 42歳、1月、『新傾向句集』刊。碧梧桐、『層雲』を去る。

3月、中塚一碧楼らと『海紅』創刊。

『新傾向句の研究』『日本の山水』出版

1916年（大正5） 43歳、12月9日、漱石没（49歳）

チューリッヒやニューヨークでダダ起こる

1917年（大正6） 44歳、11月、ロシア革命 ロダン没（満77歳）

1918年（大正7） 45歳、南洋・中国各地をめぐる 第一次世界大戦終結

3月25日、ドビュッシー没（満55歳）

1920年（大正9） 47歳、5月、御矢子没。12月、欧米へ旅立つ

1921年（大正10） 48歳、9月、『龍眠』終刊。中原悌二郎没（32歳）

1922年（大正11） 49歳、1月、帰国 4月、牛込に住む 12月、『海紅』を離れる 鷗外没（満60歳）

1923年（大正12） 50歳、1月、句集『八年間』刊。2月、『碧』創刊。9月、関東大震災 11月、満蒙旅行へ

1924年（大正13） 51歳、蕪村研究会を設ける 8月、満鮮旅行 中村彝没（37歳） 6月3日、カフカ没（満40歳）

1925年（大正14） 52歳、2月、『碧』終刊 3月、『三昧』創刊 ルビ付俳句を試みる。自分の句作を「短詩」と称し、「感情の波を重んじる写実的表現」を説く。多くの門人が離れていく。

12月、『子規の第一歩』刊 チャップリン「黄金狂時代」

1926年（大正15） 53歳、全国各地を遊歴 尾崎放哉没（42歳）

6月、ガウディ没（73歳） 12月29日、リルケ没（満51歳）

1927年（昭和2） 54歳、全国各地を遊歴 「我等の立場」 24回で終稿 芥川龍之介没（36歳）

1929年（昭和4） 56歳、『新傾向俳句への道』出版。小林多喜二『蟹工船』『春の海』（宮城道雄作曲）世界的に評価される。「ホトトギス」六百号に達する

1930年（昭和5） 57歳、1月、「日本俳句」を「三昧句」と改称 北海道、樺太、九州へ旅

3月10日、金子みすず没（満26歳）

1931年（昭和6） 58歳、全国各地を遊歴

1932年（昭和7） 59歳、山陰、四国などへ旅。「春の海」日、米、仏でレコードが発売される。

1933年（昭和8） 60歳、3月、還暦記念祝賀会の席で俳壇を引退することを表明 北陸、大和などへ旅。

2月20日、小林多喜二没（満29歳） 9月21日、宮沢賢治没（満37歳）

1934年（昭和9） 61歳、関西、九州へ旅 『子規を語る』『蕪村名句評釈』刊

1935年（昭和10） 62歳、12月31日、寺田寅彦没（満57歳）

1936年（昭和11） 63歳、外遊する虚子を横浜に送る

1937年（昭和12） 64歳、2月1日、腸チブスに敗血症を併発し、永眠。

チャップリンの「モダン・タイムズ」 帝国芸術院設立



碧梧桐自筆墓碑銘



碧梧桐と妻の茂枝



『龍眠』第一号



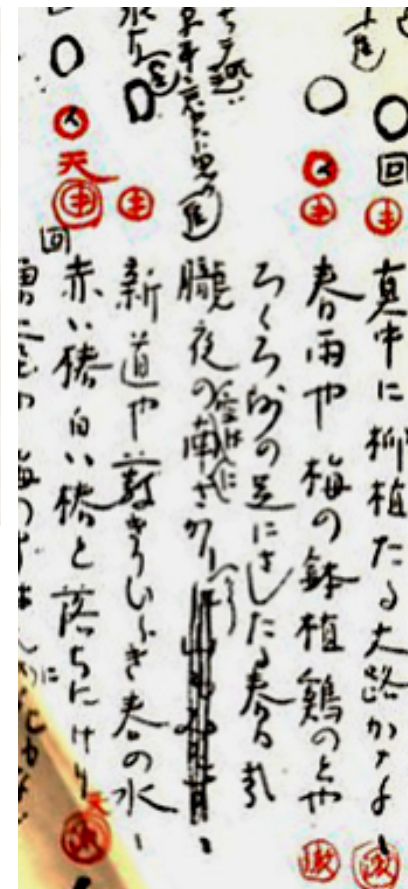
明治44年の碧梧桐



おたにくぶつ
大谷句仏

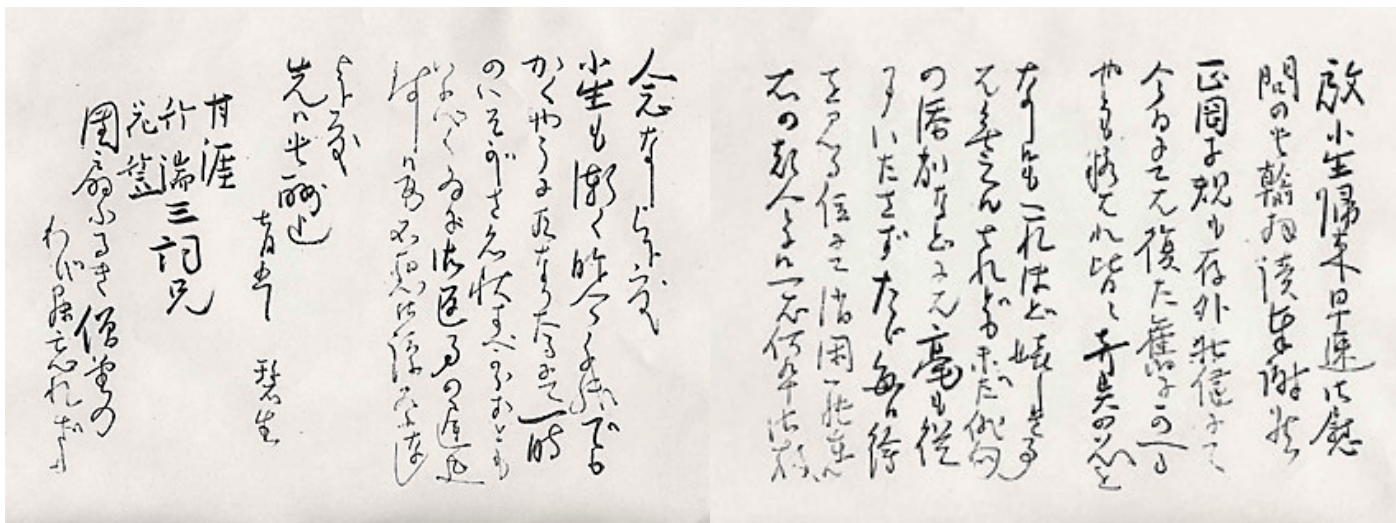
碧梧桐の詩（俳句）と書

碧梧桐の書は、十代の頃の上手な書が残っている。素質があつたのだろう。虚子との出会いも、書が上手かつたことがきっかけらしい。なぜか彼は、自分の書の拙さに気づいて、明治25年の夏、子規の『一家二十句』を臨書し、子規の書を学ぶことで自分の書を変えようと努力した。そして、明治29年頃、子規風の書が完成している。



碧梧桐「春季雑詠」部分 明治29年2月末

これは子規・瓢亭・虚子・漱石・極堂に評点を乞うた四十一句を書いたもの。句に釣り合った流麗でリズムカルな書である。これが子規風書風の完成されたもの。この中に、碧梧桐の傑作の「赤い椿白い椿と落ちにけり」の句がある。この句には、子規も漱石も◎印をつけている。詩書一体の世界。



碧梧桐書「明治30年（1897年）7月5日付、寺野甘涯・竹湍・山口花笠宛書簡」 碧梧桐24歳 富山県高岡市西光寺蔵

甘涯は、還暦を過ぎた西光寺の住職で旧派の俳諧宗匠だった。竹湍は後継ぎ。

三人は高岡の俳人、碧梧桐の影響で、「日本派」に入った。

これは、子規風書風の完成されたものである。しかし、碧梧桐は目標点に到ると、さらに新しい世界を求めて旅立ちたくなるようである。ここには、すでに新天地へ向かうための準備がなされている。流麗さと共に雄渾さが加わっている。

啓 小生 帰り来り 早速御慰
問の貴翰拝読 謝し奉り候
正岡子規も存外壮健にて
今日にては復た旧にかへる
やうも極はれ皆々奇具（危惧）の思を
なし候も これほど嬉しき事
は無之候 これども未だ俳句
の添削などには毫も従
事いたさず ただ毎日絵
を見る位にて消閑罷り在り候
右の都合に候へば何卒 御放
念なし被下度候
小生も漸く昨今手紙でも
かくように相なりたるにて一時
のいそがしき名状すべからずとも
いふべく為に御返事の
致し候段 不悪御諒察なし
被下度候
先ハ貴翰迄。

七月五日 碧生

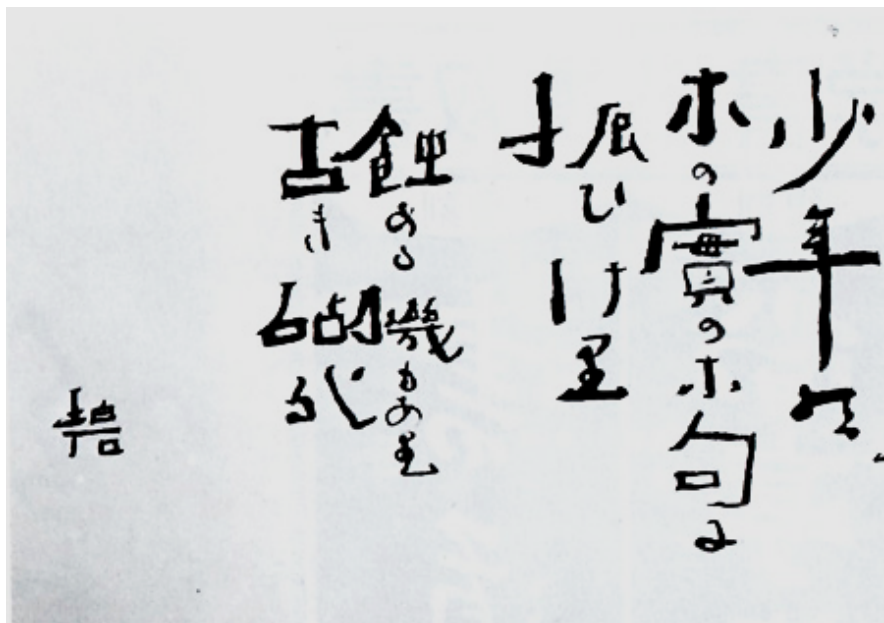
甘涯

竹湍 三詞兄

花笠

団扇ふるき僧堂の

わび寝忘れざる

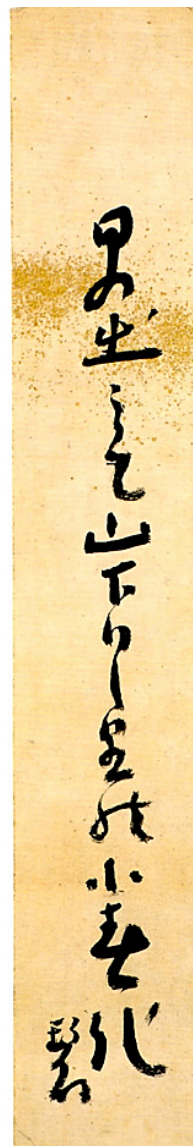


碧梧桐「玉島帖」部分 明治42年（37歳）

少年の木の實の発句に賑ひけり 蝕める幾もあり古き砧哉 碧

「書における六朝は、歌における万葉によく似ている。万葉は創始時代で、また最も振作した時代である。六朝も殆ど楷書の体を創成した時代で、多くの大家も輩出している。天真爛漫、思う処に懷をやり筆を走らせて、少しの技巧をも弄せず、一点の塵気をも交えず、殆ど形をなさぬ愚拙の中に雅味の津々たるものがある。有名な大家の作よりも、無名の小家の筆に欽慕すべきもののあることなど、万葉趣味と六朝趣味の相通じ相類するところがある。小にしては自己の書、大にしては明治時代の書というものに、改革というよりも一革命を来すべき時期ではないか・・・」（明治39年9月2日、下野足尾で、碧梧桐が述べた書論の大意）以上の事を、手習いをしながら静かに考えた述べている。

彼は、青森県の浅虫温泉に、明治40年1月16日から2月23日まで滞在、その間に不折から「爨（さかん）宝子碑」と「中岳靈廟碑」が贈られてきた。それを見て碧梧桐は六朝書に目覚め、読書や俳句の選や書の勉強に専念した。



碧梧桐書「短冊」
これは明治40年頃
の書か？横画に北魏の影響が見られる。

田の出みつ（三つ）里の小春哉 碧

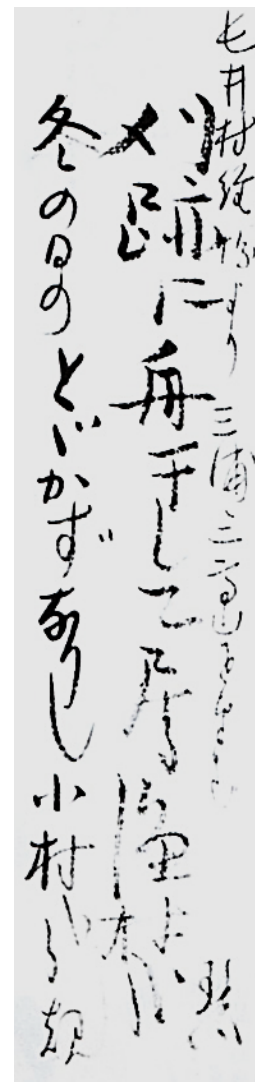
碧梧桐は、明治39年（1906）の春、中村不折を始めて訪問し、『龍門造像記』の拓本を見せられ、衝撃を受けたらしい。彼の書は、北魏の楷書の影響を受け、急激に変化して行く。この年の2月に大谷句仏に宛てた手紙はまだ流麗で、その影響は見られないが、6月の句仏宛の手紙には北魏の楷書の影響がはつきり見られる。



碧梧桐書「短冊」
明治38年頃（32歳）
新傾向俳句のリズムに
合わせて書がかかっている。

はる寒き有み焚火にあたりけり 碧

新傾向俳句。五三四五の律動。



「百景追憶帖」明治30・31年頃
碧梧桐25・26歳頃の書。

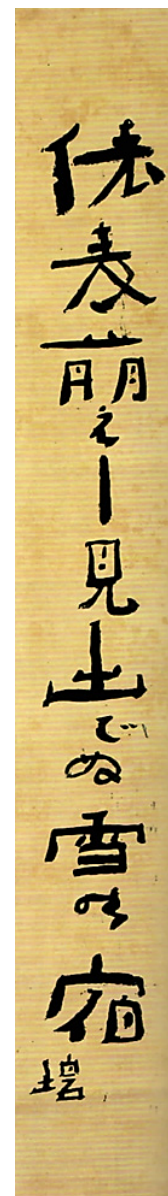
折井愚哉の描いた百景の画帖を見て作った追憶句を半紙に書き並べたもの。左側は子規が書いている。

屯井村経塚より三浦三高山を望む
刈跡に舟干して居る漁村哉 碧
冬の日のとくかずなりし小村哉 規

この頃、子規風から抜け出て個性的な表現へと向かう。
子規は碧梧桐の書を「天資の能」だ、とほめたという。

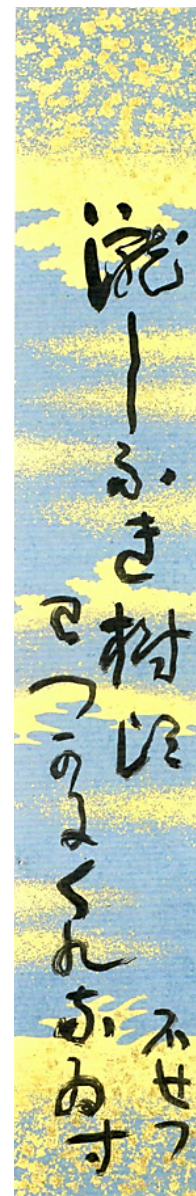
碧梧桐の書は、六朝書に出合ってから、達筆だった書風を捨てて、稚拙な六朝書風に一変していった。

依麦萌えし見出でぬ雪の宿 碧



碧梧桐「句軸」
個人蔵

瀧しぶき樹頭わづかにくれなぬす 不せつ



不折筆「句短冊」
六朝書風の書



「爨宝子碑」拓本 部分
西暦 405 年（東晋）の碑。
雲南省に現存している。

黄醅緑醅冬を迎へて熟す

絳帳紅爐夜を逐ふて開く

茂枝女

白居易の「戯れに諸客を招く詩」の一節。

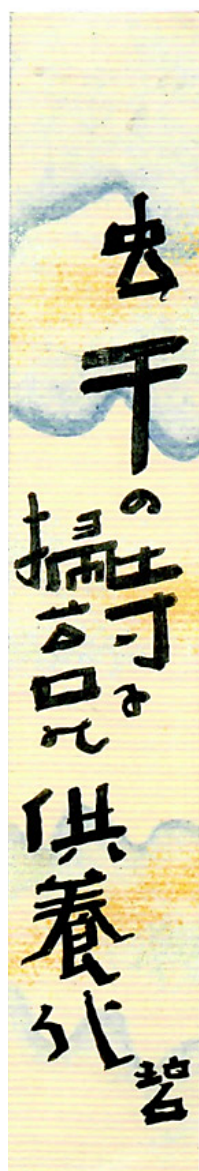


河東茂枝筆「漢詩軸」
137×33.9 cm 花笛文庫蔵

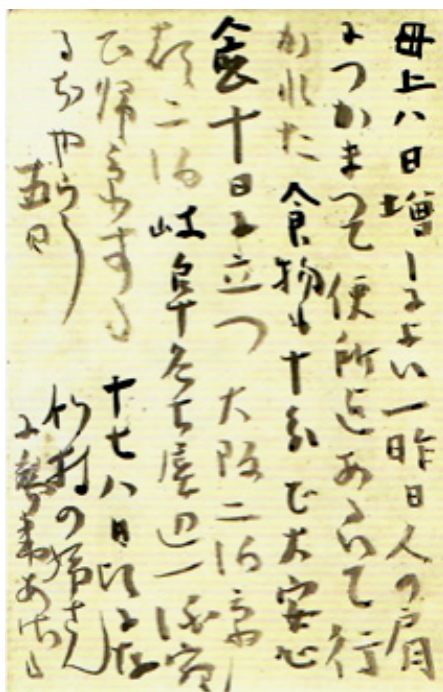
虫干の寺に掃苔の供養哉

碧

三千里の旅で碧梧桐は芭蕉や子規の旅のことを思っていた。



碧梧桐「句短冊」個人蔵
明治 40 年 7 月頃
秋田での句。



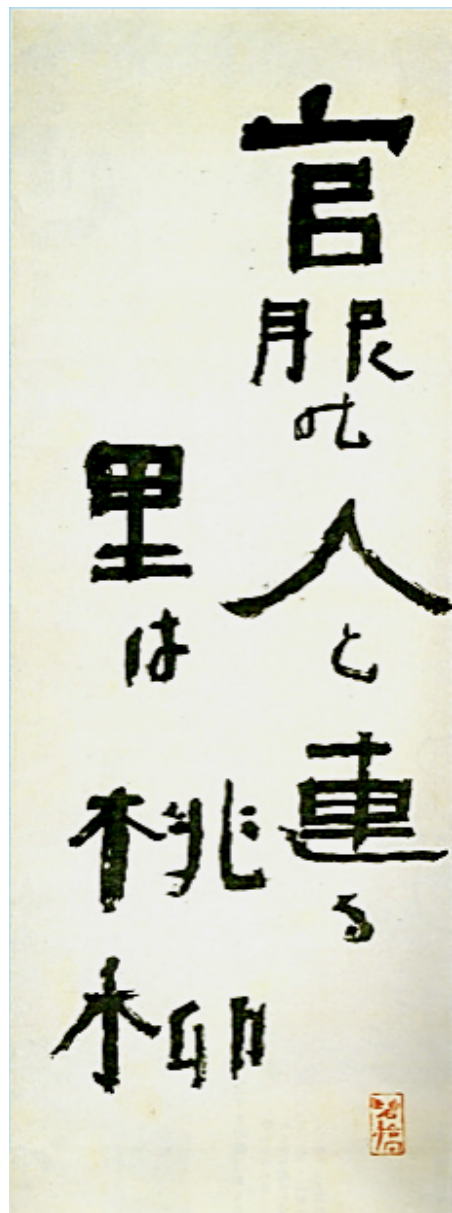
碧梧桐筆「茂枝宛葉書」明治 41 年 1 月 5 日

「母上は日増しによい。一昨日人の肩につかまって便所迄あるいて行かれた。食物も十分で大安心。愈十日に立つ。大阪二泊京都二泊岐阜名古屋一泊宛で帰京する。十七八日頃になるぢやらう。五日 竹村の姉さんに口口あげる。」

母せいは、この年の 4 月に永眠。

明治 40 年 12 月 5 日、碧梧桐は、老母が脳出血だとの知らせを越後長岡で受ける。しばらく旅を続けていたが、母の容態が悪化したので、直ちに看病のため全国旅行を中止した。

子心に不孝なまじと寒さかな 碧梧桐



碧梧桐筆「句幅」大正2年頃 典型的な六朝風

官服の人と連る里は桃柳 碧梧桐印

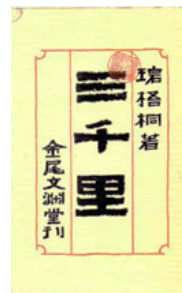
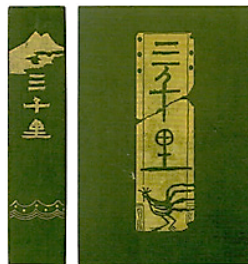


「碧梧桐印譜色紙」露珠文庫蔵 明治44年

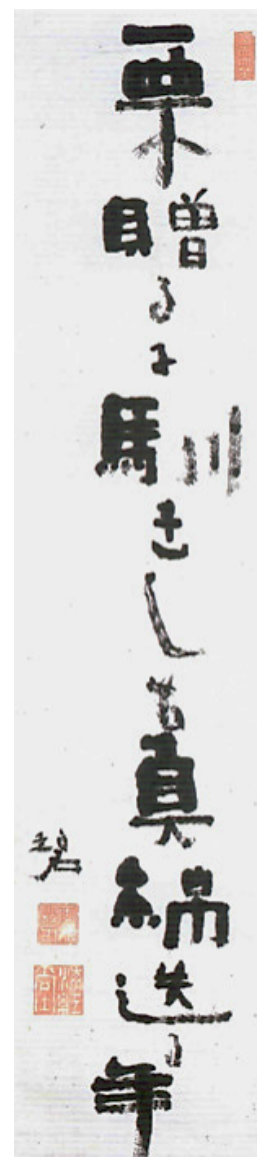


『層雲』第一巻第一号 明治44年4月刊

荻原井泉水を主宰として碧梧桐らの協力を得、東京で発行された新傾向俳句の機関誌。碧梧桐が大正4年に離脱後、無季の自由律俳句を主唱。同誌から、尾崎放哉、種田山頭火らが出た。平成4年(1992)8月、井泉水の17回忌を機に、通巻947号で終



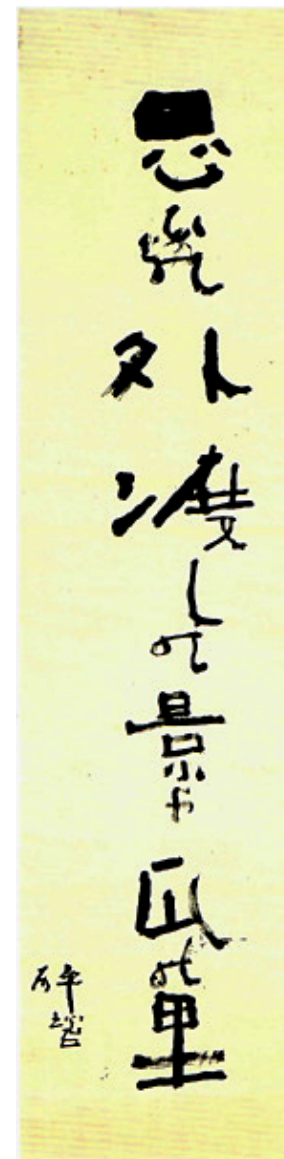
『三千里』初版 明治43年12月1日 金尾文淵堂刊



碧梧桐筆「句軸」露珠文庫蔵 137.0×31.3 cm 明治43年9月23日頃の揮毫？高知での揮毫か？

栗贈るに馴れしも真綿送る年 碧

句は『続三千里』明治43年9月23日(土佐高知)に載る。

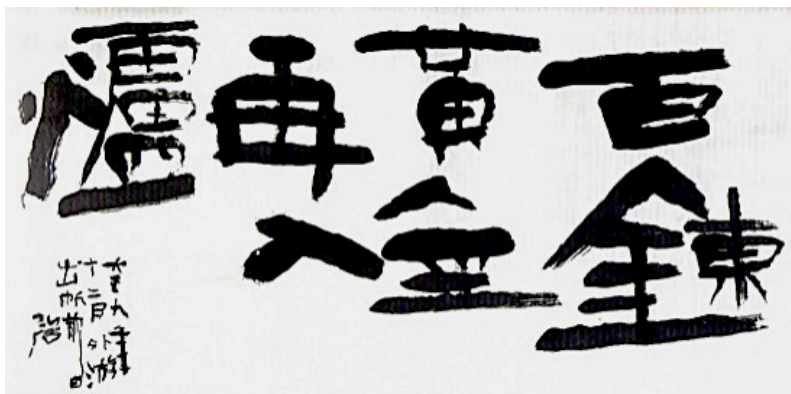


碧梧桐筆「句軸」個人蔵 136.5×32.5 cm 明治42年7月頃の揮毫？信濃松本での揮毫か？

思ひの外渡しにの景や瓜の里

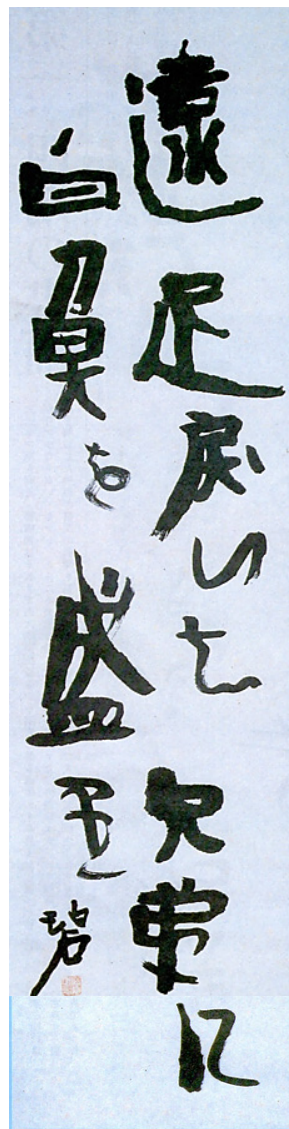
酔碧

母の病で中断していた旅を、明治42年4月24日に、再開。



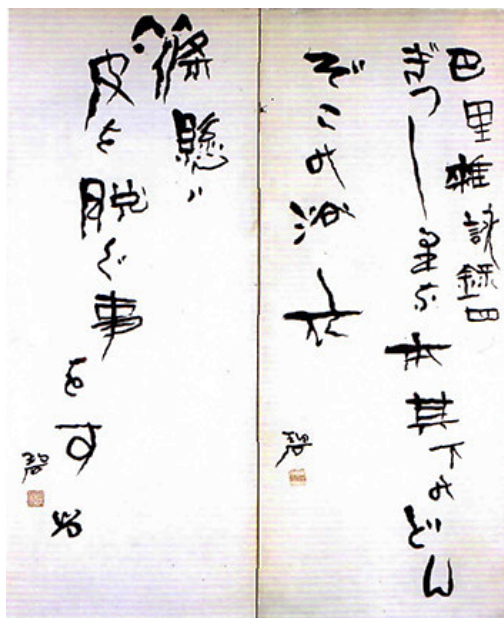
碧梧桐筆「百鍊黄金再入爐」軸 大正9年(1920年)12月 露珠文庫蔵
66×132.5 cm 落款：大正九年十二月外游出帆前日 碧

渡欧の旅に出る前に書かれた。新傾向俳句や自由律俳句の行きづまり、養女御矢子の病没など、精神的苦境を乗り越えるための旅だと思われる。パリ・ロンドン・ローマなどに滞在、イタリアでは、ルネッサンスについて徹底的に研究している。大正10年12月アメリカに渡り、大正11年1月21日に横浜に着いた。彼は世界の芸術のなかで自己の芸術について深く悟ったと思われる。



遠足戻りし兄弟に白魚を盛り 碧

碧梧桐筆「句幅」大正6、7年頃
書体が柔くなってきた。六朝書風から抜け出し、漢晋の書を母体とする書へと移行して行く。

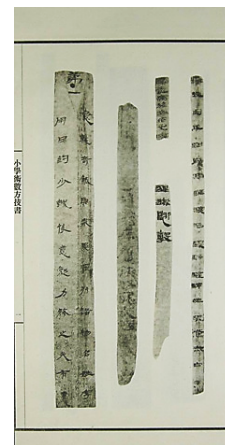


巴里雑詠録四
ぎつしりな本其下のどん
ぞこの浴衣 碧
篠懸は
皮を脱ぐ事をする 碧

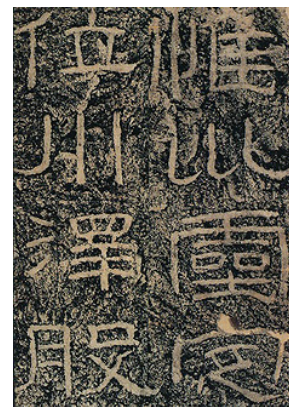
碧梧桐筆「巴里雑詠録四」
二曲一隻屏風 大正10年
167・5×68 cm
パリで制作 花笛文庫蔵



木簡



『流沙墜簡』部分



『石門頌』部分 摩崖
後漢の建和2年(148年)
漢中市博物館蔵

八分隸である。



『永寿二年三月瓶』
後漢(156年)
早書きの隸書が書かれている。

大正3年(1914)頃、碧梧桐も、彼の影響を受けた龍眠会の仲間も、ゴツゴツした六朝書の表現に限界を感じてきた。その頃『流沙墜簡』(大正3年刊)が京都に亡命中の羅振玉と王国維により刊行された。これは敦煌文献の研究書で李白文書など、588片の図版付きで、漢時代の肉筆や隸書の碑・碣・摩崖の古法帖を見ることが出来るようになった。また、中村不折が入手した『永寿瓶』の肉筆や、『石門頌』なども参考にされ、書風に変化が現れてきた。大正7、8年頃には『開通褒斜道刻石』の影響も受け、六朝よりさらに古い漢代の隸書など文字の源流に溯り、六朝風から抜け出そうと努力した。



『碧』創刊号 大正12年2月
公益財団法人虚子記念文学館蔵

大正4年(1915)1月、碧梧桐は『層雲』を去り、同年3月に中塚一碧楼らと『海紅』を創刊し自由律に転じたが、欧米から帰国したのち大正11年12月に『海紅』を去り、翌12年2月、碧梧桐の個人誌として『碧』を創刊。俳句を「詩」と称した句や『子規の回想』などの随筆、俳話、美術研究などを掲載したが、大正14年2月終刊。同年3月、『三昧』を創刊し、ルビ付俳句を試みたが、これにも行き詰まり、還暦を機に俳壇を引退した。

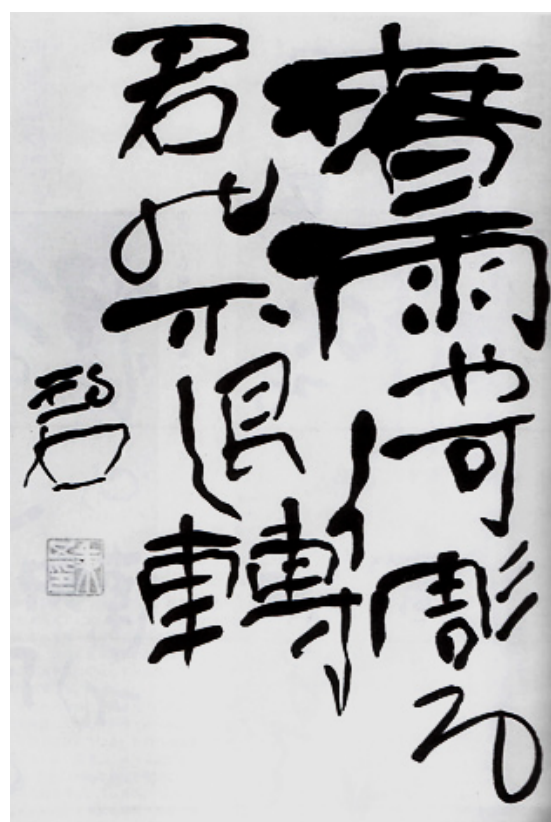
遠足戻りし兄弟に
白魚を盛り
寝る迄は起きてゐた
大地の光り 碧



碧梧桐筆「句幅」大正11、2年頃
碧梧桐は、すべての古典から自己を解放し、独自の書風を生み出して行った。柔毛、長鋒筆を使用しているようだ。

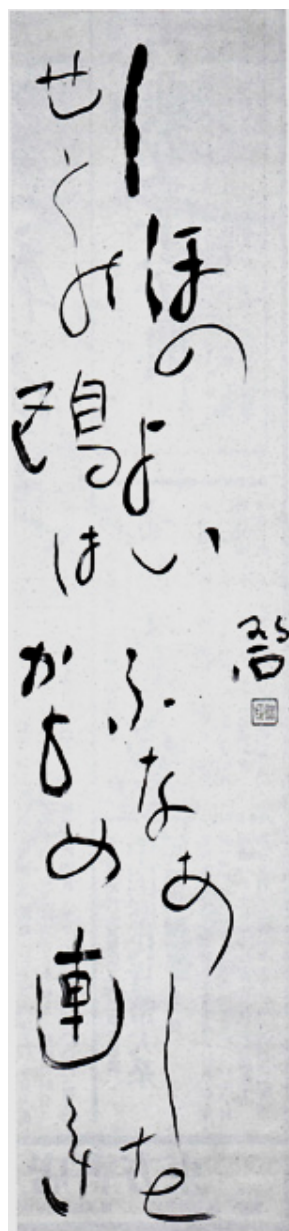
碧梧桐は、芭蕉の「奥の細道」、子規の「はて知らずの記」の旅を意識して、三千里の旅に出たと想われる。この旅のなかで、新しい俳句の方向を真剣に考えはじめ、印象派絵画や自然主義文学運動の影響も受け、写実的、現実的で、感情の律動を重んじる「新傾向」俳句へと傾斜し、子規の考えた近代俳句のかたちから離れ、独自の道を歩くことになっていった。

思はずもにヨコ生れぬ
冬薔薇 碧梧桐



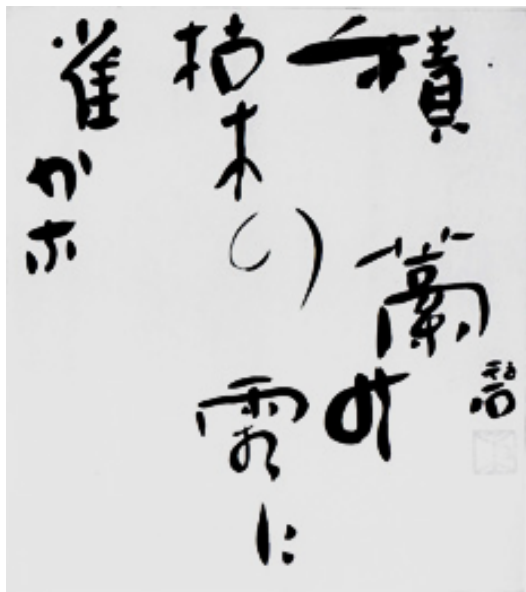
碧梧桐筆「春雨や何處に君の不退転 碧」昭和5年頃
漢晋の隸意を帯びた造形、木簡調でもあるが、彼は漢晋風を捨てて新世界に向かっている。

新傾向の俳句は彼の六朝風書体と一体である。明治43年11月14日の安芸竹原での萩原井泉水との議論のなかで「無中心論」を説き、新傾向俳句運動の到達点としたが、しかし、後この説をも否定した。その後、自由律に走り、最後の俳論「詩は感情の律動的表現、感情の波を現はす」を説き、ルビ俳句に入る。

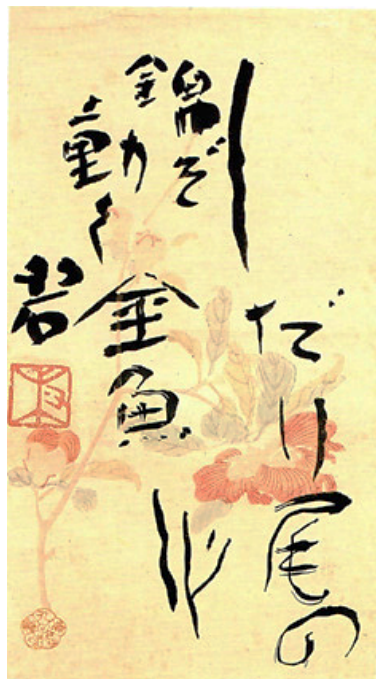


碧梧桐筆「句幅」昭和5年

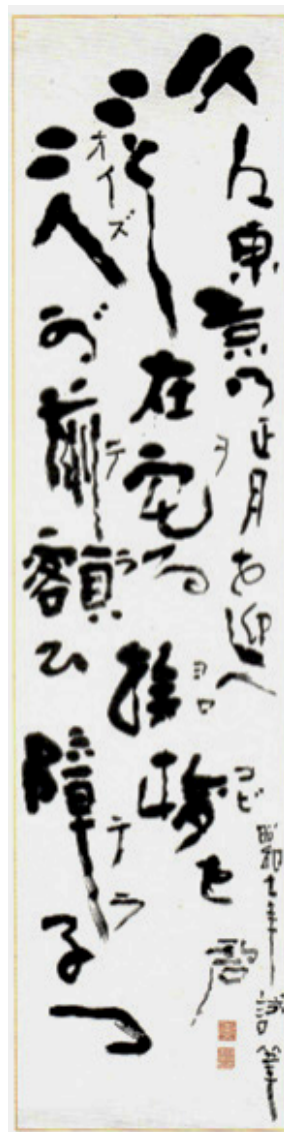
汐のよい船脚を瀬戸の鷗はかもめ連れ 碧



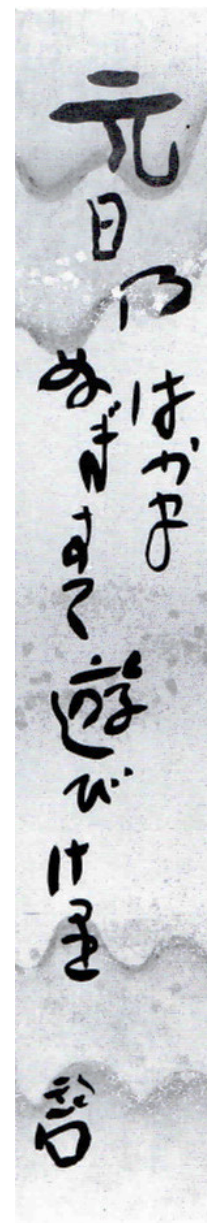
碧梧桐筆「句色紙」
積藁の 枯木の霜に 雀かな 碧



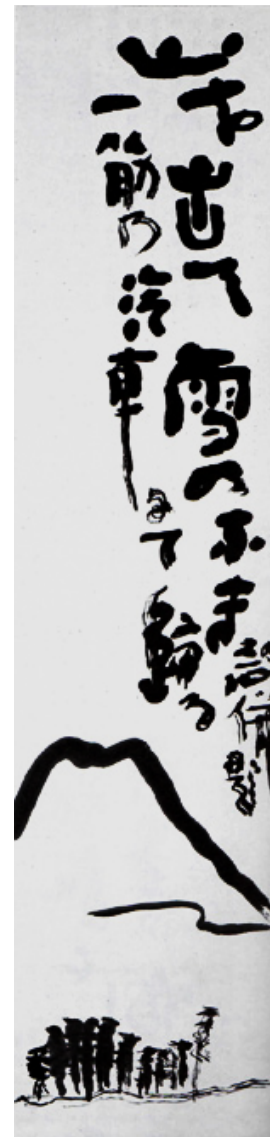
碧梧桐筆「句小品」22.5×12.5 cm
しだり尾の 錦ぞ 動く金魚かな 碧



久々東京の正月を迎へ 昭和七年試筆 碧
ことし在宅の挨拶を
オイズテラテラ
二人が前額ひ障子つ



碧梧桐筆「句短冊」



「碧梧桐自画賛」昭和9年
この頃、碧梧桐は、度々
半折の展覧会を開いたり
していたようである。

碧梧桐は、一人で欧米に旅立った。異国で頼るものは自分だけであった。彼は、一人になって俳句について、さらに芸術について、世界のなかで、孤独のうちに考えた。そのなかで、彼は、人間性の回復、個性の解放、自然人になること、芸術に終わりはないことなどに気づいたと思われる。

碧梧桐は、旅をするたびに、新しい発見をし、それを体現していった。

俳壇から引退する決意をする頃には、俳句の進展と同じく書においても、それまで学んできた古典の用筆・結構法を捨てて、自由奔放で独自の書を創造していった。

碧梧桐の晩年は大変寂しいものであったらしい。今日、彼の後継者は一人もいないといわれているが、しかし、子規から継承した彼の俳句革新(文学革新)の精神は、井泉水、一碧楼らへ受け継がれ、種田山頭火や尾崎放哉を生み出し、現代俳句へとつながっている。